研究成果報告

『18 世紀ヨーロッパ生活絵引』刊行に寄せて

―渋沢敬三の「絵引」からヨーロッパ都市景観図分析まで

熊谷　謙介
（非文字資料研究センター　研究員）

2011 年度から開始されたヨーロッパ班の研究成果として、『18 世紀ヨーロッパ生活絵引』をまとめることができた。編集・校正等に多大な時間がかかり、関係者の方々には大変お手数をかけてしまったが、研究資料がほとんどないところから始まったプロジェクトの第一弾として、非文字資料研究の華とも言うべき「絵引」を作成できたことに、まずは満足したい。

私の専門はフランス文学であるが、同時に表象文化論という枠組みでも研究を行ってきた。「表現」ではなく「表象」という概念を用いることで、文学・芸術作品のうちに作者の言いたかったことを探るよりむしろ、儀礼や図像といったものに文化や社会の意識されざる「表象」を見るという立場である。この意味で、表象文化論は非文字資料研究と類似しており、フランス視覚資料の分析に寄与すべく、鳥越輝昭代表が主宰する「ヨーロッパ絵引」研究に参加することになった。

今回上梓した『18 世紀ヨーロッパ生活絵引』の内容については、本を実際に手にとって確かめていただきたい。ここではその前史となる、渋沢敬三により発案された「絵引」のコンセプトを、どのようにヨーロッパ絵画に適用するか、その試行錯誤について記していく。今回の出版物では言及できなかった、18 世紀フランスが生んだ金字塔『百科全書』との比較から、この問題を考えていきたい。

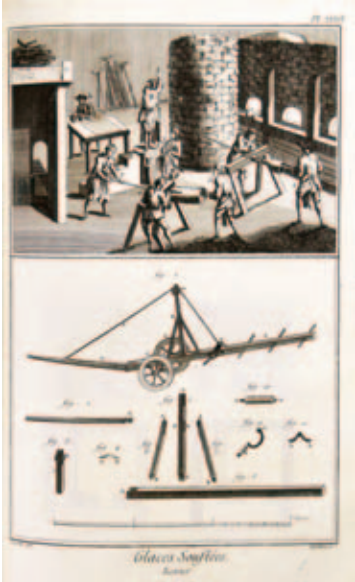
＊

フランスをフィールドとする研究者の間では、渋沢敬三は、フランスから株式会社制度を取り入れた渋沢栄一の孫として知られている（渋沢－クローデル賞という日仏文化研究成果に贈られる賞が存在するくらいである）。あるいはこの実業家一族の遠縁に当たる文学者、澁澤龍彦が著名な存在であろう。

知ってのとおり、渋沢敬三は「絵引は作れぬものか」（1944）の中で、字引があるように、絵を事項とする「絵引」というものが作れないかを模索している。その出発点にあるのが『信貴山縁起』、『餓鬼草紙』といった古代絵巻に描かれた庶民の日常的な生活風景であり、主となる物語とは別の細部の数々であった。福田アジオは、「字引に対して、絵を窓口にして事項を調べる絵引きを作るという発想の独創性は高く、世界的に類例を見ないものであった。しかも利用する図は辞書用にわざわざ描き出した図像ではない。辞書の 1 種類として、図を描いてそれに名称を付するという方式は、日本だけでなく、世界的に語学の辞書を中心に多くの例を見ることができるが、それらは必要な事物のみを辞書用にスケッチ風に描いているものである」[1] と、「絵引」と辞書に見られる「図解」との違いを説明している。実際、渋沢敬三の構想は『絵巻物による日本常民生活絵引』（1965–68）となって結実するが、絵巻の複写を土台として、着物や道具一つ一つに番号を付して作成されたのである。このような方針を採ることによって、個々の事物を抽出するのではなく、それぞれの事物どうしの連関を示し、またまわりの状況でその事物がどのように使われていたのかを明らかにしたといえよう。

こうした渋沢の構想を知ったときに、私はディドロなど 18 世紀のフランスの啓蒙主義者たちが編纂した『百科全書』を想い起こした。『百科全書』は大判で 17 巻にわたる本文だけでなく、3000 枚を超える図版の巻が 11 巻にも及ぶ、文章・視覚資料の両面にわたる世界把捉の試みであった。図版の巻は日本独自の編集で『フランス百科全書絵引』という題で平凡社から出版されており[2]、また図版は大阪府立図書館のサイトで見ることができるようになっている[3]。前者の「刊行の言葉」にあるように、ディドロをはじめとする百科全書派は、「《百科全書》の項目を執筆すると同時に、画家および彫版家に綿密な指示を与え、熱意をこめて図版解説（エクスプリカシオン）と部分名称（ノマンクラチュール）を書き上げ、ここに 3000 点を越える銅版画が成ったのである」[4]。

但し、ともに「絵引」という名で称されていても、『百科全書』の図版と渋沢が考える絵引は異なっている。例えばここに掲載した「吹きガラス」の項の図版を見ると、上部は職人たちが棒やるつぼなど様々な道具を使っている様子が描かれているが、下部にはガラスの材料が入ったるつぼを炉に入れる機械が、分解された形で示されている。福田が述べたように、『百科全書』の図版はあくまで辞書のために抽象化・再構成された図版であって、分解された機械のパーツに特徴的なように、そこに注がれる視線は、仕掛けを見てみたいという「理性」のまなざしということができる。ここに「世界は全く解読が可能な、開かれた大きな書物」[5] であるという、フーコーが示したような古典主義時代の知の枠組み（エピステーメー）を確認することもできるだろう。そこには本来は存在していたに違いない、民衆の猥雑な姿に代表されるような不透明な厚みは存在しなかった、と言うことができるかもしれない。



『百科全書』「吹きガラス」の項の図版
（神奈川大学図書館所蔵）

今回の『18 世紀ヨーロッパ生活絵引』では、渋沢敬三の「絵引」の方針にのっとって、事物の説明のために描かれた図版ではなく都市景観画を選択することで、そこに描かれた民衆の生活風景の細部の一つ一つに、またその調和に視線を注ぐことができたように思う。何回も何回も繰り返し見ていくうちに、「これは洗濯女だ！棒でたたき洗いをしている」などと、そのたび新しい発見があるのは驚きであった。今まで絵画を形式や手法を中心に見ることが個人的には多かったが、描かれている服装や習俗といった内容に「ベタに」注目していくことは新鮮だった。

調査を終えた今、次回以降の企画である「ヨーロッパ 19 世紀前半生活絵引」につなげる形で反省点を示して筆をおきたい。まず、分析の対象の多くが油彩画となったため、細部については何が書かれているか判然としないケースが見られた。所蔵されている美術館に行って現物を見たから分かったものの、画集等で見る限りでは判別できなかったものもあった。渋沢敬三も絵巻をそのまま使うのではなく、「画家で且つ民俗学者である橋浦泰雄さんに交渉して、絵巻物各種を一巻一巻丹念にアチック同人で検討してはその決定に従い同君にブラックアンドホワイトで一つ一つ複写して」[6] もらったことを伝えている。こうした複写という作業の採用が現実的には難しくても、部分拡大や図版のデジタル加工によって、細部を明快な形で示すことを今後の課題としたい。

第二に、今回は都市景観画にしぼって分析したが、民衆の風俗等をよく示す図版を参考付録としてでも掲載すべきであったということである。私が担当した図版解説では、18 世紀の作家メルシエの『タブロー・ド・パリ』をたびたび引用した。この著作は『十八世紀パリ生活誌』として翻訳されているが、図版が多く挟み込まれている。こうした図版も参考資料として挙げていれば、より濃密な、民衆の生活の息遣いが伝わってきたのではないか。

今回、絵引という形で 18 世紀のヨーロッパの都市生活を紹介することができた。今後、同時代のヨーロッパ諸地域の間での、さらには日本やアジアの人々の生活との比較検討を、技術史や比較都市論などをふまえながら行いたい。地域を越境するだけでなく美術作品と民俗資料の間を往還することで、非文字資料研究にいくらかでも寄与できれば幸いである。

【注】

(1) 福田アジオ「図像資料としての素人絵――生活絵引き編さん資料としての可能性」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第 2 号、2005 年、一頁。
(2) ジャック・プルースト監修・解説『フランス百科全書絵引』青木国夫 他 訳、平凡社、一九八五年。
(3) 大阪府立図書館－デジタル画像 フランス百科全書 図版集
http://www.library.pref.osaka.jp/France/France.html
(4) 注(2) 前掲書、四頁。
(5) 注(2) 前掲書、十四頁(ジャック・プルーストによる序文)。
(6) 渋沢敬三「絵引は作れぬものか」『祭魚洞襍考』岡書院、一九五四年、六二〇頁。